

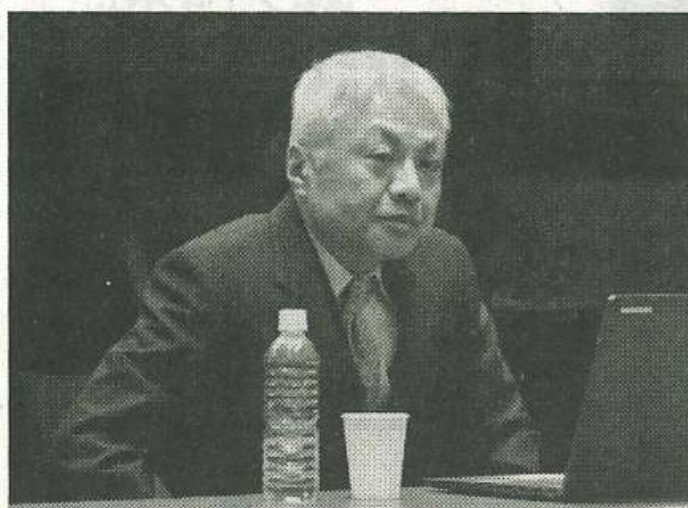
# 仏教は中間共同体として平和構築に貢献

## 佛教文化学会「戦後80年」シンポ

### 星川啓慈氏が基調講演

「世界平和記念日」とも呼ばれる第一次世界大戦の休戦記念日にあたる11日、「宗教と戦争―戦後80年を迎えて」をテーマに佛教文化学会（林田康

順理事長）のシンポジウムが東京・西巢鴨の大正大で開かれた。宗教哲学者の星川啓慈・同大特任教授が仏教による戦争抑止を巡って基調講演し、



講演した星川教授

「仏教は中間共同体として世界平和構築に貢献できると話した。星川教授は「宗教は戦争勃発の抑止にかなる貢献をなしうるか？―仏教を中心に現実主

義と平和主義の『狭間』で考える」の題で発表。軍備増強などの物理的手段で安全保障を確保する現実主義の立場は認めざるを得ないが、「平和主義を捨て去る必要はない」と仏教の可能性を探った。

宗教による「平和の祈り」に関して、顕著な効果が認められず、合理的でないとの意見があるとしても、「宗教の真骨頂は世俗的知見を超越することにある」と強調。「個々の寺院の平和への祈りが社会の価値意識をつくり上げるものになりうる。そのために社会へ祈りを発信することが重要だ」との世界仏教徒青年連盟の村山博雅会長の発言を挙げ、人々と社

会をつなぐ中間共同体としての仏教の活動に着目した。

震災支援をはじめ終末期患者への心のケア、貧困支援などといった社会参画仏教の活動が、中間共同体の役割を果たしている」と指摘。その上で、「仏教徒による平和思想の普及、深化のための活動が世界の市民の平和思想の醸成に寄与し、その結果、仏教は間接的とはいえ戦争勃発の抑止に貢献できる」と述べた。

パネル発表では、「国家の利用か？仏教の協力か？―昭和前期の制度と実態」の題で三浦周・同大非常勤講師が登壇した。仏教の戦争協力を巡って、信仰心を利用した思想善導やその影響を受けやすい構造があった組織体制、国家の意向を反映

した布教などを検証し、国家からの統制・国家への協力の両側面があったと指摘。さらに地域の民意を受けた個別の寺院の祭祀的営為という観点では、どちらとも言えないとの見方も提示した。

その上で、戦時下の各教団の対応について、「国家の法律と教団の宗規、地域の民意のいずれにも背いていない。当時の正しさに沿ったものと言える。自らの正しさを顧みることが非常に難しい」と述べ、戦争責任に対する各教団の反省がどういうものだったのか疑問を投げかけた。

「新しい宗教徒たちの『戦争』問題」福井淳・同大名誉教授と「戦時下における仏教教団の報国運動」小林淳道・同大非常勤講師の発表もあった。